

「エ、情ない奴やな、飯をよそへ」

御飯を食べますと肩揉め足擦れと二十四孝の横藏そこ退け、無理の八百も云ふて其儘大の字なりに成つて寝て仕舞ひましたが、此男夜遊が好きで朝の起きぬ男、無理に起すと喧嘩を吹掛けますので、お婆さん門へ出て一人言を云て居ります。

「ハイ／＼何誰もお早うさん、甚う表を人が走りますのは何でござります、ア、さようか坐摩の前に心中が有ると、女が十八男が二十歳であつたら雷の花散らしましたな可愛想に、さようか……」一人言を云ふて是れを聞いた息子、なんし人寄りと聞いたらジツとして居られまへん、寢床からムク／＼と飛んで起きました。

「なんぢや、坐摩の前に心中が有ると退け、オ、ライシヨ／＼」

跳で飛出しました、お婆さんは慣れてますので後片附けて御飯拵へを仕て待つて居りますと、息子は坐摩の前へ行たが何事も無い、シ、ラシンとしたア、咄いて歸つて來ました。

「コラ婆」

「兄、早うから何處へ行きやつたんや」

「坐摩の前に心中があると云ふたやないか」

「兄なにかいな坐摩の前に心中が有つたんかへ」

「有つたんかへて汝云ふたやないか、女が十八男が二十歳、あつたら雷の花を散らしたと」

「兄あれかいな、あれは私が十六の年やがな」

「なんぢや十六の時や、今から五十年も前の事を吐してるのぢやが」

「兄、寝やるか」

「今頃から寝たら仕事に行くのに遅なるわい、飯を喰ふて仕事に行くわい」

「オ、／＼、そうしやれ、そうしやれ」

「そうしやれ／＼」

御飯を食べると辨當を持つて仕事に行きます、日が暮れますと向ひの酒飲極道が

「ヨイトサノサちうやつぢや、ア、酔ふたな『お酒飲む人眞から可愛お神酒あがらぬ神はない』ちうて、又歸つたら親父のお眼玉や（トン／＼）お母はんチョツと開けとくはらんか（トン／＼）お母ん、母者人、昔の娘はん、今では皺くちやのお婆はん、チョツと開けとくはなれや（トン／＼）もうし」

「コレ婆どん、極道が歸つて來た、今晚と云ふ今晚は開ける事はなりません」

「マア／＼親父どん腹も立つやろうが今晚の處は」

「イヤなりません」